

山東省の傀儡軍について

馬場毅

はじめに

抗日戦争中、山東省は華北で最も傀儡軍の多い地域であった。とりわけその傾向は、一九四一年以後顕著になっていった。そして傀儡軍の多くは、「曲線救国」を唱えて国民党軍から投降した者であり、一九四一年には、傀儡軍の人数は国民党軍の人数を上回るようになった。(1)

従来、華北の傀儡軍についての研究は、中国史研究者の間でも、革命史に収斂する問題関心のあり方から日本軍に協力した傀儡軍等は忘れられた分野であった。(2) しかしながら、現在、中国現代史のパラダイムが問われている時、この時期の日本軍やそれに協力した傀儡軍等、革命や抗日に反対した勢力の多様な動きを再構成し、それとの対抗の上で、再度抗日勢力を位置づけて中国現代史を再構成する必要がある。

ところで本報告のテーマに関連して、石島論文(3) は中国占領地の華北における日本の軍事支配の経過と問題点について総体的にとり上げて得る所が多い。ただ日本の軍事支配全体をとりあげていて、傀儡軍政策に焦点を絞っている訳ではないし、また中国側の傀儡軍についても治安軍(華北綏靖軍)以外についてはほとんどふれていないし、個別山東省の問題をとりあげている訳ではない。また中国では汪精衛政権の研究の進展がめざましいが、余子道論文は汪精衛政権支配下の各地の傀儡軍をとりあげており、汪精衛政権との関連の中で山東省における傀儡軍についてもふれている。デヴィット・ポールソン論文は、山東省での中国共産党(以下中共と略称)ゲリラと比較して、国民党ゲリラの失敗の要因を分析しているが、国民党ゲリラの失敗の結果、多くの傀儡軍が生まれたとし、国民党ゲリラ側から山東省の傀儡軍発生^の要因について分析しており、示唆される所が多い。また台湾では、劉熙明著書が、1937年から1949年までの中国全土についての傀儡軍の分析をしており、示唆される所が多いが、山東省については代表的な傀儡軍の事例の分析にとどまっている(4)。

本報告以上の先行研究を踏まえて、第一、日本軍の傀儡軍育成の方針、第二、山東省における傀儡軍の実態とその発生^の要因について述べたい。ただし本報告は、拙稿「山東省の傀儡軍について」(5)を資料を追加し補訂したものである。

一、日本軍の方針

日本軍による傀儡軍育成の方針は、三つの段階に分けられる。

第一段階は、抗日戦争開始から一九四一年一月までの時期である。この時期は傀儡軍の建軍時代であり、国防軍の建設は将来のこととし、当面占拠地域の治安維持に任ずる警備部隊や警察の育成を目的としていた。(6)

警備部隊の中心となるのは治安軍(中国側は華北綏靖軍と称す)であり、これは、中華民國臨時政府の下で一九三九年一〇月一日設立、華北全体で八個団(三個集団と二個独立団、定員約一万五〇〇〇名)おり、山東には独立第八団が済南に置かれた。一九四〇年三月、汪精衛国民政府が成立し、中華民國臨時政府が解消して華北政務委員会となったが、その時に華北政務委員会治

安総署および華北綏靖軍司令部が北京(7)に置かれ、齊燮元が華北綏靖軍総司令兼治安総署督弁に任命され、華北の軍隊および警察を統轄することになった。(8) 一九四〇年一〇月、河北省の一〇県、山東省の二県で治安軍(華北綏靖軍)は警備を担当することになった。配備当初は日本軍と混合配置された(9)。

第二段階は、一九四一年一月三〇日から一九四三年三月までの時期である。この時期は軍隊として整備し、日本軍占拠地の治安肅正に協力できるようにすみやかに実力をつけることを目的としていた。(10)

すなわち一九四一年一月三〇日、大本営陸軍部は、汪精衛国民政府との日華基本条約成立に伴う新国軍の建設と、それにより日本軍の在華兵力の削減の肩代わりとなる警備力を充実して長期持久戦に備えることを狙いとして「支那側武装団体整備並指導要項」を出した。(11)その中でこれらの傀儡軍は「当分ノ間我カ占拠地域ノ治安肅清ニ協力スルヲ主トシ併セテ国民政府政策遂行ノ支柱タリ得ルヲ目的」(12)としていた。そして「正規ノ軍隊」と「正規ノ軍隊以外ノ武装団体」と分け、「正規ノ軍隊」は、①、汪精衛国民政府直轄軍隊は華中方面に約一万以内、華南方面に一万以内、②、華北政務委員会所属の治安軍が、剿共軍等を含んで約一〇万以内、③、蒙古連合自治政府の「蒙軍」が約一万以内とすることを、整備量の標準とした。(13)

ただし後述するように国民党軍の帰順を受けいれ、汪精衛国民政府の直轄軍隊は、華北の山東省にも置かれた。なお汪精衛国民政府に関する武装軍隊は、「支那」派遣軍総司令官あるいは関係軍司令官の命令または指示を、国民政府軍事委員会顧問及びこれに属する機関等を以て指導し、華北政務委員会、蒙古連合自治政府所属の武装部隊は、「北支那」方面軍司令官、駐蒙軍司令官の命令を、当該軍所属の顧問、教官等を以て指導する(14)とあり、その軍隊の傀儡軍的性格が明確であった。その経費は、「中央政府又ハ地方ノ行政機関等」の中国側から支出することを「本則」としていた。(15)

なお治安軍は、一九四一年五月一日、河北省冀東道の警備を担当し、日本軍と共同して剿共を行うことになった。(16)

この頃、華北の日本軍占拠地区内で日本軍に協力した中国側武装団体は、①、治安軍(華北綏靖軍)。②、警防隊：前冀東政府の保安隊を改編したもの。兵力約四〇〇〇名、京古鉄道(?)沿線の四県の警備を行っていた。③、警察及び省、県警備隊：華北政務委員会治安総署の下の警察官の総数は約六万三〇〇〇名、一県平均約一三〇名であった。省警備隊は山東省のみ保有していた。県警備隊は総数七万二〇〇〇名、一県平均約二〇〇名であり、大隊または中隊に編成されて、県知事(県長?)の指導下に日本軍と協力して、主として土匪討伐を行っていたが、逐次剿共に必要な役割を演ずるようになった。その他に伝統的な組織である県保衛団や保甲制度が設けられていた。④、帰順部隊(汪精衛国民政府直轄部隊に編成されたものを含む)：この大部分は、八路軍や蔣系国民党中央軍を除く地方軍、雑牌軍、土匪などである。数は多いが質は悪かったという(17)。

ところで当時「北支那」方面軍作戦主任参謀であった島貫武治によれば、これらのうち最も有力な武装団体は、警察及び省、県警備隊、とりわけ警備隊であった。また伝統的組織である県保衛団等は、指導によっては自ら対中共自衛にあたり、非常に成果をあげたが、治安軍は、治安戦における実績において必ずしも期待にそうものではなく、また帰順部隊も澆刺たる闘争心に乏しく、とても八路軍に対抗できるものではなかったという。(18)

なお一九四一年七月頃、治安軍は総兵力五万四〇〇〇人で、その主力は第一～第七集団(一

集団は二個団からなる)に編成されて河北省冀東道に配備され、その他に冀東の密雲、平谷警備中の警防隊約四〇〇〇人がいたが、近く治安軍に改編される予定であったという。

帰順部隊は汪精衛国民政府直轄部隊になった以外に、兵力が多く素質の比較的良好なものは「剿共軍」とし、華北政務委員会から固定軍費を支給し、所在日本軍の指揮下に治安警備を担当した。総兵力約八〇〇〇人、第一～第三路軍に分かれ、河北省順徳付近、山東省萊陽付近に配置していた。その他の帰順部隊は一般に「皇協軍」とし、暫定的に軍費を支給し逐次整理解消するよう指導中であったが、総兵力約一万七〇〇〇人であったという。(19)

県警備隊は日本軍進駐後、県の自衛力強化のために既存の県保安隊、警備隊を逐次改編したもので、「北支那」方面軍としては、その実力を高く評価していた。一九四一年一二月末の総人員約九万五〇〇〇人、一県当たり平均二五三人であった。県警備隊の指導は各県駐屯の日本軍各隊が担当し、中央では華北政務委員会治安総署が統轄し、その指導は日本側の軍事顧問部が担当した。

警察も以前のものを逐次回復し、改編再教育して育成してきたもので、一九四一年一二月末の総人員約六万九〇〇〇人、一県当たり平均一四四人であった。警察の指導は該地駐屯の日本軍憲兵が担当し、中央では華北政務委員会治安総署警察局が統轄し、その指導は日本側の軍事顧問部が担当したという。(20)その後、一九四三年二月に機構改革をして、華北政務委員会内務総署が警察行政を統轄し、治安総署は新たに宣導局を設け対中共思想宣伝を強化することになった。(21)

そしてこの間、一九四一年三月から一九四二年一二月にかけて、五回にわたる治安強化運動が行われた。治安強化運動は日本軍が華北政務委員会と協力して行った。

第一次治安強化運動は、一九四一年三月三〇日から四月三日にかけて行われ、①、区郷村地区の自治自衛力の育成強化、②、民衆組織の強化拡大、③、治安攪乱分子の排除削減を実施目標とした。具体的には反共自衛団と保甲制を樹立し、戸口調査を行った。さらに東亜新秩序の理念、日満華条約の内容の普及宣伝を行った。なお河北省、山東省では、県知事が率先して警備隊、警察、自衛団による討伐を統制指揮した。(22)

第二次治安強化運動は、一九四一年七月七日から九月八日にかけて行われ、剿共を実行し、治安を確保することを治安強化運動の重点にし、特に郷村の武装自衛組織拡大強化に力をいれた。(23)

第三次治安強化運動は、一九四一年十一月一日から一二月二五日にかけて行われ、活発な軍事行動とともに強力な経済戦を行ったところに特色がある。(24)特に山東省では、運動推進のために、山東省公署省治安強化運動本部を樹立し、省長唐仰杜が本部長を兼ねた。(25)

第四次治安強化運動は、一九四二年三月三〇日から六月中旬にかけて行われ、華北政務委員会が指導の主体になり、新民会が実践面における中核となり、日本軍、興亜院連絡部が協力して、「東亜解放」、「剿共自衛」、「勤儉増産」を三大目標にした。中国側では、日本軍は治安区(日本軍占領区)で保甲制を強化し、准治安区(遊撃区)を蚕食し、未治安区(抗日根拠地)を掃蕩した、としている。(26)

第五次治安強化運動は、一九四二年一〇月八日から一二月一〇日にかけて行われ、「滅共」を第一として、「農産確保」、「物価低減」、「生活革新」を目標とし、軍、官、会、民の総動員を行い、華北の建設仕事を促進しようとした。中国側では封鎖を強め、抗日根拠地を蚕食した、とする。(27)

第三段階は、一九四三年三月から日本降伏までの時期である。この間、一九四二年一二月二一日の御前会議において「大東亜戦争完遂ノ為ノ対支処理根本方針」が決定され、対華新政策が行われ始め、一九四三年一月、汪精衛国民政府は、英米に宣戦布告するとともに、従来よりも日本軍からの相対的な自立を認められた。(28)そのためこの時期の方針は汪精衛国民政府統治下の占拠地域内において、日本軍の肩代わりをして、独力で治安の維持肅正が出来ることを期待し、将来は逐次日本軍の作戦にも協力できる実力を養成させることを目的としていた。

また太平洋での戦局悪化にともない「北支那」方面軍所属の多くの部隊が中国から派遣され、華北における日本軍の軍事力が弱体化していった。一九四三年一月初頭の「北支那」方面軍の兵力は九個師団、一〇個独立旅団、一個騎兵旅団、一個戦車師団からなりたっていたが、大本営はそのうち七個師団を南方などに派遣し、代わりに独立混成旅団を基幹とする新師団をあらたに編成し、さらに独立歩兵旅団を新設したが、従来の師団に比べて両者とも戦力は劣っていた。(30)

一九四三年三月、大本営陸軍部は再び「支那側武装団体整備並指導要項」を出した。その中で、この間の国民党軍の帰順による汪精衛国民政府支配下の軍隊の増加を受けて、「正規ノ軍隊」として、①、汪精衛国民政府直轄軍隊は、地域も華中・華南と限定せずに約二五万以内に増加し、②、華北政務委員会所属の治安軍は、数は変わらず剿共軍等を含んで約一〇万以内、③、蒙古連合自治政府の「蒙軍」も数は変わらず一万以内とすることを、整備量の標準とした。(31)

その後、一九四三年一〇月、汪精衛国民政府は華北における支配下の軍隊の増加に応じて「駐華北委員弁事処」を設置し、華北綏靖軍を除いた汪精衛国民政府直轄軍の軍務処置を担当させた。(32)

また従来、県警備隊は各省独自で運用されていたが、これを華北政務委員会が統一して一元的指揮をはかるために、一九四三年五月、「保安隊条例」を制定し、警備隊を保安隊に改称し再編成した。そして華北政務委員会内務署督弁が総司令に、各省長が保安司令、各道尹が保安指揮、各県長が県隊長となり剿共に全力をあげることになった。(33)

治安軍は一九四三年末に約五万二〇〇〇人に達する部隊を編成して以後、兵力は増加せず、警備、討伐の第一線に出動した。准正規軍は約二万で帰順部隊の増減により若干増減した。その後一九四三年十一月、杜錫鈞が齊燮元に代わって治安総署督弁、華北綏靖軍総司令に就任した。(34)

一九四四年に入って、治安軍や華北の汪精衛国民政府直轄軍は、国民党軍とは交戦しないという信条を持ち、もっぱら担任地区内の警備に任じたが、八路軍には太刀打ちできず、次第にその地盤を蚕食されていったという。この原因について当時治安軍の軍事顧問であった山崎茂は「政府支出の経費が不足していたので、糧秣等は現地徴発を実施し、これがために民心が離反したこと、指揮官に人材が得られなかったこと、給料の中間搾取がおこなわれるなど軍紀が弛緩し、戦意が旺盛でなかったこと」などを指摘しているが、(35)この点は華北の汪精衛国民政府直轄軍にもあてはまるものと思われる。

この間、四月には大陸打通作戦が行われて、「北支那」方面軍からも兵力が派遣されたことも華北の治安の悪化を招き、八路軍の局部的反攻を招くとともに、八路軍による傀儡軍への寝返り工作もさらに進められた。(36)

一九四四年九月上旬、「北支那」方面軍は「北支警備刷新計画」を作成し、戦略物資の獲得と輸送のため「要域及び鉄道の両側に治安を確立する」方針に切りかえた。(37)

一九四五年六月には「北支那」方面軍はさらに戦面を縮小し、「済南、石門、京津地区を拠点として、これを固守」することになった。(38)この時「北支那」方面軍は、北方からのソ連軍の

進攻に備えつつ、アメリカ軍は山東半島に上陸するものと予想して第四三軍に準備を進めさせ、さらに南方からの国民党軍の反撃に備えていたが、占拠地区では八路軍の局部的反攻に直面していた。「北支那」方面軍の支配は、かろうじて主要都市、交通線及び資源地域を維持していただけであった。(39)

二、抗日戦争前半期における傀儡軍

ここで取り扱う時期は、前述した日本軍の傀儡軍育成時期の第一期、すなわち抗日戦争開始以後から一九四一年一月までの時期である。

まず最初に日本軍の山東省への侵入について述べる。津浦鐵路沿いに南下した「北支那」方面軍の第二軍は、一二月二七日に省都済南を占領し、三十一日には泰安を占領した。日本軍はさらに南下し一月初旬には済寧、鄒県に達したが、この間中国側からはほとんど抵抗らしい抵抗に会わなかった。膠濟鐵路沿線では、一月一〇日に東端の青島を占領した。山東省主席の韓復榘は、国民政府の命令に反して、済南防衛にあたらなかったとして逮捕され、軍法会議にかけられたうえ一月二四日に銃殺された。津浦鐵路沿線は第五戦区とされ李宗仁が司令長官に任命された。(40) 韓復榘軍は孫桐萱が総司令となりその軍を率いたが、その後部下の将領のある者は国民党にとどまり蒋介石の反共政策に追随し、ある者は日本軍に投降し漢奸となり、ある者は引退して、その軍は分散していった。(41)

津浦鐵路以東、膠濟鐵路以南の濱海、魯中、魯南地域に対しては、日本軍は青島を出発して諸城を経て、二月二三日に莒県を占領し、また臨朐より南下した部隊は二月二二日に沂水を占領し、さらに日照より西進した部隊も加わり、第五戦区所属の中国軍の抵抗を押し切り臨沂を占領した。

津浦鐵路方面では、三月中旬から四月初めにかけて、台兒莊をめぐる日中両軍の死闘が繰り返されたが、湯恩伯軍や孫連仲軍等により、第二軍所属の瀨谷支隊が、四月六日、台兒莊から撤退を余儀なくされ日本軍最初の敗北を喫した。つづいて「北支那」方面軍は、四月中旬、約四個師団を動員して徐州に向かい、「中支那」派遣軍も呼応して、五月五日より津浦鐵路地区を北上し、徐州の中国軍を包囲に向かった。徐州は五月一九日に陥落し、日本軍は津浦鐵路の打通、隴海鐵路の把握に成功したが、中国軍の大軍を捕捉撃滅することはできなかった。

その後「中支那」派遣軍は八月下旬から武漢作戦を發動し、四方向から漢口に向かい、一〇月二五日、漢口を陥落させたが、中国側の抗戦の意志は衰えず戦争は長期化していった。(42)

ところで徐州会戦直後の一九三八年六月の山東省における日本軍の支配形態は、中共側の分析によれば以下のものであった。①、政権組織として山東省政府（馬良省長）を設立し、膠東、魯北、魯東、魯南に道尹を置き、その下に県長を置いた。②、徳県、平原、禹城、泰安、大汶口、濰県、周村等の津浦鐵路、膠濟鐵路の大きな駅および公路上の中心の県城に宣撫班を置いた。これは済南の日本軍の特務機関の指揮を受け、各地のごろつき、漢奸、地方の劣紳を招いて、維持会および各種の漢奸団体（たとえば大同社）を設立した。③、自衛隊、偵探隊を組織し、遊撃隊の状況を専門に偵察報告させるとともに、土匪・会門を利で誘って招撫した。④、厳格な戸口登記を行い、登記後は一人を加えることも減ずることも許可せず、良民證を発行した。農村の手製の火砲、銃、長矛および各種の武器を接収した。⑤、日本軍の布告、ビラおよび中華民族、政府の領袖、抗日党派等を侮辱する画報を散布する等の宣伝活動を行った。宣撫班は漢奸団体を動員して、郷村で宣伝を行った。⑥、都市では大いに阿片を売り、洋行、妓女館を設立した。⑦、済南市内では、強制的に各家の学生を入校させ奴隸化教育を行った。⑧、遊撃隊が戦いを仕掛けて

きて、破壊した公路、鉄道、電線付近の村落に対して、残虐な放火、殺人、強姦を行って報復を行った。(43)

ところで日本軍は完全に山東省を占領したのではなく、魯西北、魯北の一〇分の九の県は中国側が維持しており、魯西、膠東でも多くの県を中国側が維持していた。(44)日本軍の支配できたのは、津浦鐵路沿線と膠濟鐵路沿線の「点と線」の地域であり、この時期、臨沂・台兒莊・徐州会戦などで魯南に兵力を集中していて、その背後に兵力を展開する余裕はなかった。このような隙をついて、「敵後抗日根拠地」がつくられていき(45)、かつ後背地の支配と治安維持のために、傀儡軍が必要になった。

表一は、武漢作戦に日本軍が集中し後背地の山東省の兵力が相対的に手薄になった頃の傀儡軍の状況である。

表一、一九三八年一〇月の傀儡軍

指揮者	人数	拠点		
膠東				
高玉璞	四五〇〇	掖県	◎	●
劉積治	不明	招遠	○	
劉越郷	二四〇〇	棲霞	○	
李建五	一五〇〇	海陽	○	
王欽堂	一〇〇〇	萊陽	○	
韓炳宸	二〇〇〇	萊陽	◎	
紀淑和	一二〇〇	即墨	◎	
姚時武	五〇〇	即墨	○	
魯北				
孫疑賛	三〇〇	鄒平	○	
孫王和	五〇	齊河	◎	
華満英?	八〇	禹城東部	◎	
刑運慶	四〇〇	禹城東部	◎	
濱海				
李鴻生	一三〇〇	膠南?	◎	
相明虬	一〇〇〇	膠南?	◎	
張歩雲	四〇〇〇	諸城	◎	●
劉奎堂等	二〇〇〇	諸城	◎	
魯中				
張子仲	二〇〇	濰川	○	
魯南				
季香亭	不明	泗水	○	
劉金貴	二〇〇〇	鄒県	○	
劉照漢	不明	滕県	○	
魯西				

周級三	一二〇	禹城西部	◎
高文斌	五〇〇	齊河	◎
劉仙舟	三〇〇	泰安	◎
杜振山	三〇〇	泰安	◎
尹慶穆	五〇〇?	兗州	◎
昆厭章	五〇〇	魚台	◎
候憲明	二〇〇〇	濟寧	◎
孫宣亭	五〇〇	濟寧	◎
劉本功	五〇〇	東平	◎
曹景王?	一〇〇〇	東平	◎
張応欽	四〇〇〇	鄆城	○
吳連際	二〇〇〇	臨清	◎
王閻賢	五〇〇〇	臨清	◎
李文華	一〇〇〇	邱県	◎
五金甲	二〇〇〇	館陶	◎

出所、防衛庁防衛研修所戦史室『北支の治安戦』<一> 朝雲出版社 一九六八年、付図第二「軍占據地域匪情及治安恢復状況要図（昭和十三年十月末日頃ニ於ケル）」による。一九四〇年七月の状況は、付図第四「北支那方面敵情及治安恢復状況要図（昭和十五年七月末日頃ニ於ケル）」を参照した。

備考、○印、日本軍への帰順申込、◎印、帰順確定。●印、一九四〇年七月には国民党系遊撃隊となっているもの。指揮者不明な者は除いた。

なお膠東は膠濟鐵路以東の山東半島一帯、魯北は膠濟鐵路以北で津浦鐵路以東の地域、濱海は膠濟鐵路以南の沿海地域、魯中は膠濟鐵路以南で津浦鐵路以東の地域の北部、魯南は膠濟鐵路以南で津浦鐵路以東の地域の南部とした。

この中で比較的経歴の解るものを述べると、魯西の劉本功は、山東省の濟寧県人で、もともと濟寧の有名な土匪の頭目であった。抗日戦争以前、国民党山東省主席韓復榘部隊の手槍（短銃）旅（旅長呉化文）特務隊隊長であった。その隊員の多くは土匪、ごろつき、封建的な幫会の成員であったという。一九三八年一月に日本軍が濟寧を占領した後、劉本功は日本軍に投降し、魯西南防共自治軍司令兼鄆城県県長となった。

その後、彼の支配下の兵力は拡大し、一九四三年末には、濟寧、汶上、嘉祥、鄆城、巨野、魚台等の数十県の五〇〇〇人（最大では一万余人）の兵力を糾合し五〇余中隊に分け、冀魯豫抗日根拠地を絶えず「蚕食」し、日本軍は 城県を「治安模範県」とし、劉本功を「模範県長」と呼んだ。

同じく魯西の泰安の劉仙舟は、劉仙洲ではないかと思われる（舟と洲の発音は zhou の第一声で共通である）。劉仙洲は山東省の泰安県人で、抗日戦争前、青島で日本の浪人と親密なつきあいをしていた、日本の特務と関係を持っていたという。抗日戦争開始後の一九三七年一二月、日本軍が省都済南、ついで泰安を陥落させると、劉は故郷の泰安に戻って親戚友人等の人脈を利用して、地回りごろつき、散兵を招いて部隊を編成した。一九三八年一月一日、日本軍が範築

先の率いる魯西北根拠地の中心である聊城を陥落させると、劉は部隊三〇〇余人を率いて聊城に移動した。その後一九三九年二月に、聊城駐在の日本軍一個大隊に率いられて莒县城を占領し、莒県県長兼保安司令となった。

その後、劉の部隊は一九四二年には一五個中隊のほかに警察局、特務隊、剿共班等を有して総計約三〇〇〇人に拡大し、魯西北七県における最強の傀儡軍になった。そして日本軍と呼応して魯西北抗日根拠地の冠県の南部、朝城県の北部を「掃蕩」し、抗日根拠地の中心区に脅威と危害を与え続けた。劉仙洲自ら日本人の模範的県長であると自認していたという。

この時期の傀儡軍の特徴について述べると、第一は、表一作成に依拠した地図によれば、例外的に膠東、濱海にもいるけれども、傀儡軍のいるのは主として日本軍の侵入した津浦鉄路沿線、膠濟鉄路沿線の地域であることである。第二は、王閻賢五〇〇〇人、張応欽四〇〇〇人が例外的に多人数であるが、概して多くても一〇〇〇から二〇〇〇人の規模で、中には数百人、数十人の規模のものもあり、部隊の数は少人数である(この時期、結局国民党遊撃隊にとどまった高玉璞、張步雲は除外する)。第三は、傀儡軍になったのはどういう者かということであるが、少数の略歴の解るものから言えることは、もともとあまり政治的信念の確固としていない土匪出身者か土匪の経験があり、かつて軍閥軍(張宗昌、韓復榘)に招撫され軍隊に参加したことがあるが、自らの所属していた軍隊が没落(張宗昌軍)、あるいは分散してしまったりして(韓復榘軍)、日本軍に帰順して、日本軍を利用しながら再び日の目を見ようとした者(後述する趙保原[かれは表一の時期には国民党に寝返っていた]、劉本功)。また土匪出身者で、宋哲元、商震にその軍が殲滅されたため、日本軍を利用して再起を図ろうとした者(後述する劉桂堂)。また劉仙洲のように何らかの形で日本の出先機関等と関係の深い者である。第四は、これらの傀儡軍の指導者の多くは、劉本功や劉仙洲のように地方の県長に任命されたり、警備隊に任命されたものと思われる。特に県長は抗日遊撃隊や土匪の攻撃を受ける可能性があるため、保安司令の職を兼ねていて武装している必要があり、その点からも帰順してきた部隊の指導者は適任であったと考えられるであろう。

ところで趙保原は、元奉天派軍閥張宗昌の部下であったが、後に東北に行つて土匪になった。その後日本軍に帰順し満州国軍に属した。抗日戦争開始後、満州国軍衛隊第三師第一旅旅長となった。一九三八年、日本軍とともに山東省に移動し、膠東地区の平度に駐屯した。その後日本軍と対立が生じて殺されそうになったため、一〇月、国民党に投じ暫編第一二師師長兼国民党の魯東軍区司令官、山東省第一三区專員、保安司令を歴任し、「曲線抗日」を唱え膠東地区の国民党の反共頑固派の中心となったが、その後も密かに日本軍との関係を維持したという。そのため中共、八路軍側は傀儡軍扱いした。(48)

劉桂堂は、一九二〇年代から有名な大土匪であったが、一九三六年二月、その部隊は東光県境で国民党の宋哲元、商震部隊の襲撃を受け殲滅された。そのため劉桂堂は天津に行つて日本軍に投じた。一九三七年末、皇協軍前進総司令の職を得て、潜伏先の天津から日本軍とともに山東省に戻った。一九三八年膠東の液県、即墨で勢力拡大し、三〇〇〇余名の人数となった。勢力拡大にともない、日本軍の指図に従わなくなり、日本軍から武装解除されそうになり、日本軍と衝突した。そのためこの年の末、膠東を出て「寝返つて抗日をする」と唱え、魯中山区に移動し、魯蘇戦区総司令于学忠から国民党新編第三六師師長に任命された。一九三九年春、生まれ故郷であり、二〇年代に活動していた魯南の平邑県に移動した。(49)

両者とも抗日戦争初期には、日本軍の傀儡軍であったが、その後国民党に寝返り、後に旗色が

悪くなると再び日本軍に投じるというその経歴は類似していた。

その後に傀儡軍化したものとして抗日戦争開始後、故郷の五蓮県で武装部隊を組織し、一九三八年六月、部隊一六〇〇人を率いて、国民党新六師高樹勳軍に参加し、独立第二旅旅長となっていた莫正民が、一九三九年冬、日本軍に帰順し、魯南滅共軍支隊長となり、その後、莒県大隊副隊長となり、莒県に駐屯した。(50)

また山東省東南部にあって、抗日軍団長であった路朝元が、抗日雑牌軍に見切りをつけて、一九四〇年夏、旅長を殺害して日本軍原田部隊に帰順し、新泰東方に駐屯し地方の治安維持を行った。兵力は最初五〇〇〇人いたものが整理され三〇〇〇人であった。(51)

三、抗日戦争中期における傀儡軍

ここでは前述した日本軍の傀儡軍育成時期の第二期、すなわち一九四一年一月三〇日以後の時期を取り扱う。

この時期には、傀儡軍の数が飛躍的に伸びてくるのであるが、その原因について述べてみたい。

第一は、汪精衛国民政府による積極的な軍隊拡張政策である。汪精衛国民政府は既に一九四〇年三月に成立していたが、最初、その指揮下に入った軍隊は、南京にあった中華民国維新政府から引き継いだ綏靖軍や日本軍から移管された皇協軍を改編した部隊等であったが、前述したように大本営陸軍部が、汪精衛国民政府との日華基本条約成立に伴い新国軍の建設を認め、汪精衛国民政府強化を始めた一九四一年一月、国民党蘇魯皖辺区遊撃縦隊副総指揮李長江が、江蘇省泰州で「和平宣言」を発表して、汪精衛国民政府に投じ第一集團軍に改編され、二月に国民党江蘇省保安第八旅旅長楊仲華が投降し、蘇皖辺区綏靖総司令に任命されて以来、国民党軍を収編することが汪精衛国民政府の軍隊拡大の主要なルートとなった。(52)

山東省でもまず、一九四一年春、魯南の泗水県に駐屯し、山東独立第一旅と自称していた于惠民が汪精衛国民政府に収編され(53)、同時期に魯西北の臨清県に駐屯し、山東独立第四旅と自称していた馮寿彭が、汪精衛国民政府に収編された。両軍とも当地の土匪を組織化していたというが、国民党の地方軍に属するものと思われる。その後馮寿彭は山東省警備隊第一大隊に改編された。(54)

また一九四一年十一月、国民党の正規軍である第三九集團軍（総司令は元西北軍の高樹勳）所属の第六九軍軍長畢沢宇、教導師師長文大可は、部隊を率いて韓城（？）で日本軍に帰順した。文大可の部隊は汪精衛国民政府の暫編第三一師に改編され、文は師長となった。その後、一九四三年四月、保安隊に改組された。(55)

第二は、日本軍による軍事的進攻と政治的な投降誘導活動の強化である。軍事的進攻としては、前述したように一九四一年三月から一九四二年一月にかけて、断続的に五回にわたって行われた治安強化運動と、その間に主として抗日根拠地に対して行われた「掃蕩」がある。この背景にあるのは、この間の太平洋戦争の開始とともに、日本軍が中国の占領地区を「太平洋戦争の兵站基地化」しようとして、それに敵対する八路軍に対しては、軍事的進攻を強化し、国民党軍に対しては、軍事的進攻と政治的な投降誘導活動の強化したことが挙げられる。(56)

第三は、国民党側の主体的問題である。

正規軍の面では、山東省に駐屯していたのは、一九三九年四月以来、魯蘇戦区総司令于学忠の率いる東北軍と、河南省、河北省の省境地帯等にいた元西北軍等のいわゆる雑牌軍であった。これらの軍は、蒋介石直系の中央軍と異なり、華北の日本軍に直面する戦場に派遣されながら、国

民政府から十分な補給や給養が与えられなかった。そのためこれらの軍隊は徐々に戦闘力を弱体化し、日本軍の軍事的攻勢に抗しきれなかった。他方でこれらの軍は、地盤をめぐって八路軍とも対立し、両者の間ではままた武力衝突も起きた。

地方軍の面では、山東省主席兼魯蘇戦区遊撃総司令の沈鴻烈が、一九四一年八月に山東省を離れた(57)のは、大きな打撃となったものと思われる。従来、沈鴻烈は山東省における国民党の地方ゲリラ組織者としての役割を果たし、八路軍のゲリラの拡大を阻止しようとして八路軍と対立し、中共・八路軍からは国民党の反共頑固派の典型とされた。両者は、一九四〇年八月、当時、国民党の山東省政府のあった魯村をめぐって武力衝突する等(58)たびたび対立した。ただ国民党の地方軍にとっては、強力な後ろ楯であったと思われる。その後、従来沈鴻烈と組んで、反共活動に力を注いでいた牟中珩(第五一軍軍長)が後任になったが、中共からは沈鴻烈と異なり団結の対象となっていた于学忠は第五一軍軍長の職を周毓英に代え、牟中珩の第五一軍への指揮権を奪い、山東省主席に祭り上げたという。(59)

以上のような不利な条件をかかえた国民党の正規軍と地方軍は、日本軍の軍事的進攻に抗しきれず、かつ地盤をめぐって八路軍とも対立していたため、一部の東北軍や元西北軍や地方軍が自己保存を計るために、「曲線救国」を唱えて日本軍あるいは汪精衛国民政府に投じていった。その傾向は一九四二年から顕著になってきたが、太平洋戦争の緒戦における日本軍の勝利も、国民党軍の将領の抗戦の前途に対する信念を揺るがしたという(60)

そして第三次治安強化運動直後の一九四二年一月一日、まず国民党保安第三七旅旅長で徳平に駐屯していた曹振東が、日本軍と傀儡軍八〇〇〇余人による冀魯辺区に対する大「掃蕩」の中で日本軍に帰順した。(61)

続いて正規軍の国民党第三九集團軍副総司令であり魯西南に駐屯していた元西北軍の孫良誠が、一九四二年四月二日、通電して日本軍、汪精衛国民政府に帰順し、その後汪精衛国民政府の和平建国軍第二方面軍総司令となった。孫良誠軍の傀儡軍化以後、全国的に傀儡軍が飛躍的に増加することになった。

孫良誠軍は二個軍五個師で編成され、その兵力は三万余であった。八月、劉郁芬の後任として、開封綏靖公署主任となり、その部隊は、山東省の定陶、曹県、河南省の濮陽、東明、考城一帯の冀魯豫抗日根拠地に駐屯し、汪精衛国民政府の中原地区の最大の部隊となった。(62)

また第四次治安強化運動後の一九四二年九月、諸城、日照一帯の土匪李永平の日本軍への帰順申し込みがあり、李の軍は濱海警備軍となり、李は司令となった。その後日本軍独立混成第五旅団の直接指揮を受け、諸城東南の泊児鎮を中心とする諸城、膠県、日照地区に駐屯し、兵力は三六〇〇人に及んだ。(63)

また一九四二年一〇月からの第五次治安強化運動に呼応した山東省における日本軍の軍事作戦により、一万五〇〇〇人の帰順投降者が出たが、その中で元沈鴻烈の部下であった国民党保安第一二旅第六団張希賢部隊二〇〇〇人は、諸城保安隊に編成された。(64)

四、抗日戦争後期における傀儡軍

ここでは前述した日本軍の傀儡軍育成時期の第三期に入る直前の一九四三年以後を取り扱う。前述した国民党軍の大量の傀儡軍化の傾向は一九四三年も続いた。この年の特徴を述べてみたい。

まず第一に国民党山東省政府の軍事力の基礎であった呉化文軍が日本軍に帰順し、汪精衛国民政府の山東省における最大の軍事力となった。

すなわち国民党新編第四師師長および魯南の地方部隊により編成した山東省政府保安第一師の師長であり、山東省臨沂一帯に駐屯して国民党山東省政府の警備を行っていた元西北軍の韓復榘の部下であった呉化文が、日本軍の工作を受け、さらに国民党の特務組織である軍事委員会調査統計局(軍統)の戴笠の密命を受けて、一九四三年一月一八日、新編第四師および山東省政府保安第一師を率いて日本軍に帰順した。その兵力は中共側によれば一万前後、日本軍側によれば四万といわれている。なおこの時、山東省政府保安處處長寧春霖、およびかつて韓復榘軍に参加して抗日戦争開始以後、諸城、高密、平度一帯を支配していた山東省政府保安第二師師長張歩雲(張も呉と同じく山東省主席沈鴻烈系の人脈であった)も帰順した。

その後、呉化文は汪精衛政権の和平建国軍第三方面軍総司令となり、寧春霖は副総司令となり、その軍は二個軍五個師で編成された。

張歩雲は、剿共軍第二師師長、和平建国軍第三方面軍暫編第一軍軍長、さらに山東国民自衛軍副総司令兼第一集團軍司令(軍団長)となった。(65)

その後、呉化文軍は傀儡軍としては例外的に日本軍と協力して、国民党軍への攻撃を行った。すなわち、二月、呉化文軍は日本軍独立混成第五旅団、独立混成第六旅団と協力し、国民党魯蘇戦区の第五一軍(周光烈軍長)と魯東剿共軍厲文礼軍を攻撃し、厲文礼は日本軍の捕虜になり、日本軍に帰順して、その軍は魯東和平建国軍となった。四月にも、呉化文軍は日本軍と協力し、第五一軍と新編第三六師(劉桂堂師長)を攻撃した。さらに五月にも日本軍独立混成第七旅団とともに、新泰東方において魯蘇戦区総司令于学忠軍軍部および第一一四師(黄徳興師長)を捕捉し、捕虜および遺棄死体各一〇〇〇人の大きな打撃を与え、魯蘇戦区内に動揺をもたらした(66)。

第二に、魯蘇戦区の魯南指揮部総司令兼第一二師副師長であった東北軍の榮子恒が、日本軍と呉化文軍の新泰東方への攻撃に耐えかねて、六月六日、日本側によれば約二万人、中国側によれば約四〇〇〇人の部下を率いて日本軍に帰順し、汪精衛国民政府の暫編第一〇軍軍長に任命された。(67)また同日、国民党魯北専員兼保安第四師師長劉景良が、日本軍に投降した。(68)この後、呉化文軍と榮子恒軍は、日本軍と協力してたびたび抗日根拠地を攻撃した。

第三に、七月に、国民政府の命により于学忠軍が山東省から移動するとともに、国民党の山東省政府も山東省から移動していった。于学忠軍の代わりに山東省への移動の命を受けた国民党の第二八集團軍兼蘇魯豫皖第一路李仙洲軍が、魯西南で八路軍冀魯豫軍区に阻止されて、九月に山東省への移動を断念したため、(69)山東省には、国民党の省政府もなくなり、正規軍もいなくなった。このことは、日本軍と八路軍に対抗していた残された国民党の地方軍にとっては、独立して生き残っていくことを大変難しくした。国民党の山東省の軍隊の数は、一九四三年になると魯西区をあわせても五万人に激減していき、傀儡軍は一八万人にのぼった。(70)。

かつて一九四〇年から一九四一年にかけて何度か魯南の抗日根拠地に進攻して中共・八路軍と対立していた劉桂堂は、李仙洲軍が八路軍に阻まれて山東省移動に失敗した後、国民党軍の番号は放棄しなかったが、変わり身早くとも日本軍に投降し、和平建国軍暫編第一〇軍(榮子恒軍長)第三師となった(71)。

また一九四〇年に国民党青島市政府秘書長、代理市長兼青島保安総隊長となった李先良は、一九四〇年冬から一九四一年春にかけて、部下の多くを日本軍に投降させ、留東支隊と称し、日本軍と宥和的な関係を保ちつつ八路軍と対立していた。(72)その後中共側では、日本軍に投降し青島特別区皇協軍総指揮になったとするが、(73)李本人は、一九四三年から一九四五年にかけて、青島の近くの嶗山で日本軍と戦っていたと主張している。(74)

また魯蘇戦区第一〇縦隊兼二八支隊隊長王洪九は、はっきりした時期は不明であるが多分この年の九月に、日本軍に投降し沂州道皇協軍司令となった。(75)

第四に、一九四一年から一九四二年にかけての最も苦しい時期を脱した八路軍は、反撃に転じた。そしてその攻撃対象となったのは、主として傀儡軍であった。

まず魯中軍区、濱海軍区の八路軍は、七月に于学忠軍の移動した後の沂魯山区、五蓮山区の支配権をめぐる、七月から九月にかけて沂魯山区、五蓮山区において第一次討呉戦役を行い、呉化文軍、張歩雲軍および厲文礼軍に打撃を与えた。厲文礼軍との戦いのさ中の七月、中共側から反共頑固派、摩擦専門家とみなされ、かつて「太和惨殺事件」を起こした国民党の秦啓榮が、安邱で八路軍に殺された。(76)同じく七月には、八路軍冀魯豫軍区が、暫編第三一師文大可軍に対して全面攻勢をかけ、朝城等の拠点を占領するとともに、旅長二名以下七三二名を捕虜にし、一〇〇〇余名を殺害した。(77)

一一月には、八路軍魯南軍区第三団、第五団等が、再び日本軍に投じた和平建国軍暫編第一〇軍(栄子恒軍長)第三師劉桂堂を、費県西南の東疋子村で攻撃して殺害し、その部隊一〇〇〇余名を殲滅した。さらに八路軍冀魯豫軍区は濮陽の八公橋で和平建国軍第二方面軍孫良誠軍の総司令部二〇〇〇余人を殲滅し、参謀長甄紀仁を捕虜にした。また八路軍濱海軍区は、贛榆城を一時解放し、和平建国軍第七一旅李亜藩(李は元東北軍第五七軍軍長であった繆激流の副官であったが、繆激流が追放された一九四〇年の「九・二二」除奸運動後に日本軍に投じた)部隊一六〇〇人を李も含めて捕虜にした。(78)

一二月、魯中軍区の八路軍は、魯山山区を占拠し、さらに抗日根拠地の沂蒙山の北部地区に進攻してきた呉化文軍に対して、第二次討呉戦役を行い、激戦の結果、魯山南部、沂水西北の東里店一帯を回復した。(79)

以下では一九四四年以後の特徴について述べてみたい

第一に、一九四四年に入ると、四月に大陸打通作戦が行われて、「北支那」方面軍からも兵力が派遣されたことにより、日本軍の兵力が不足しかつ戦力が低下したため、逐次兵力を集約し、津浦、膠濟鉄路沿線地区確保態勢に移行した。八路軍はますます勢力を拡大し局部的反攻を行ったが、日本軍に対しては、正面から戦いを挑むことをせず、主として傀儡軍への襲撃を行った。ただ秋以後になると、小兵力の日本軍分屯隊に対しても襲撃するようになった。(80)

三月から四月にかけて、魯山山区の南麓の魯村、南麻、悦荘等に展開していた呉化文軍に対して、八路軍魯中軍区の六個団および濱海軍区の一つ個団は、第三次討呉戦役を行い、一万余の呉化文軍のうち、五一〇〇余人を捕虜にし、一個旅六〇〇余人を投降させ、八〇〇余人を死傷させ、総司令部を殲滅し、山東省の傀儡軍の主力である呉化文軍に壊滅的な打撃を与えた。その結果、八路軍は魯山の大部分の地区を支配するとともに、沂山、魯山、泰山、蒙山の山区根拠地の連絡を通じるようになった。(81)

費県南部の嶺口山区に駐屯し魯南根拠地を分割していた栄子恒軍に対して、五月、八路軍魯南軍区第三団、第五団等は、討伐偽軍栄子恒戦役を行い、第二師師長劉国禎以下二〇〇余人を死傷させ、五一六人を捕虜にし、嶺口山区を解放した。(82)

七月、諸城東南の泊兎鎮を中心とする諸城、膠県、日照地区に駐屯していた濱海警備軍李永平軍三六〇〇人は、八路軍濱海軍区の攻撃を受け、七〇〇余人が殲滅された。(83)

八月、八路軍冀魯豫軍区魯西北軍分区は、魯西北における最強の傀儡軍莘県県長兼保安司令劉仙洲軍を殲滅した。(84)また八路軍冀魯豫軍区第八分区は、鄆城地区の「模範」劉本功に対

して攻勢を加え、拠点三七カ所を占領し傀儡軍二三〇〇人を捕虜にし三〇〇人を殺し、壊滅的な打撃を与えた。(85)

一九四五年五月、東平県に駐屯していた山東省警備隊馮壽彭軍は、日本軍第九独立警備隊の一個小隊とともに、八路軍冀魯豫軍区により殲滅された(86)。

第二に、八路軍は傀儡軍に対して、軍事的打撃を与えるだけでなく寝返り工作を進めた。その結果、傀儡軍の中には日本軍の前途に見切りをつけて、八路軍に寝返る者も出てきた。たとえば、一九四四年七月、渤海地区の寿光西北一帯に駐屯していた山東滅共救国軍第一師第八団王道部隊一六〇〇余人は、渤海地区の八路軍の夏季攻勢の時に寝返り、その後八路軍山東軍区独立第一旅となった。(87)

莒県に駐屯していた莒県大隊副隊長莫正民は、八路軍の工作を受け、一九四四年十一月一日、八路軍濱海軍区、魯中軍区、山東軍区の部隊一万余人が莒県城を攻撃した時に、莫正民部隊三五〇〇人は八路軍に寝返り、その後八路軍山東軍区独立第二旅となった(88)。

一九四五年一月一七日、第五次治安強化運動中に日本軍に帰順して、諸城保安隊に編成されていた張希賢の部隊一五〇〇人は八路軍に寝返った。その後八路軍山東軍区独立第三旅となった。(89)

さらに一九四五年六月五日、八路軍は夏季攻勢を開始し、魯中軍区は安邱の魯東和平建国軍厲文礼軍を攻撃したが、その時第一〇団韓壽臣軍は八路軍に寝返り、その後八路軍山東軍区独立第四旅となった。(90)

その他に海軍では、一九四四年十一月五日、威海衛劉公島の海軍、威海衛要港司令部、その直属基地隊および練兵營六〇〇余名は、日本兵および傀儡兵を死傷させた上で、鄭道済にひきいられて、軍艦一隻、汽船二隻に乗船して酒館に上陸し、膠東の東海軍分区に加わった。(91)

その他に、沂州道皇協軍司令王洪九のように、一九四五年一月、国民党に戻り山東省第三專員になり、後に保安師長兼煙濰汽車公路司令となった者もいる。(92)

第三に、この間に汪精衛国民政府直轄軍の主力は、他省に移動したり、あるいは八路軍に殲滅されて山東省から姿を消した。

一九四四年十一月、孫良誠軍は、汪精衛国民政府の命により、蘇北の揚州、泰州一帯に移動し、孫良誠は揚州で蘇北綏靖公署主任となった。(93)一九四五年二月、山東省の傀儡軍の中心吳化文軍は、汪精衛国民政府の命により、済南から安徽省蚌埠地区に移動し、津浦鉄道の南の区間の防衛に当たることになった。(94)

また津浦鉄路防衛のために泗水県城に駐屯していた榮子恒軍は、魯南軍区と魯中軍区の八路軍に攻撃され、軍長榮子恒、参謀長朱江等が殺され、第三師師長朱復寧が捕虜になり、榮子恒の率いていた第一〇軍の軍部、直属部隊は一挙に殲滅されてしまった。(95)

日本の降伏後、国民政府は国民党軍が遠く華中、華南の西方にいて、山東省には国民党正規軍がいなくて日本軍占拠地区への進駐が遅れたため、日本軍の八路軍への降伏を禁止し、国民党軍が進駐するまで津浦鉄路、膠濟鉄路沿線等の占拠地区での日本軍の治安維持を命じるとともに、(96)傀儡軍を国民党軍に任命して八路軍に対抗した。

すなわち、一九四五年八月一七日、当時安徽省蚌埠にいた和平建国軍第三方面軍総司令吳化文を済南綏靖区司令とし、江蘇省徐州にいた和平建国軍第七方面軍総司令兼淮海省省長郝鵬拳を国民党新編第六路軍総司令とし、青島特別区皇協軍総指揮李先良(前述したように本人は傀儡軍化

を否定しているが)を青島市市長とし、山東国民自衛軍副総司令兼第一集團軍軍団長張歩雲を膠高海防司令とした。そしてかつて国民党魯北行轅主任であり、一九四四年一月に国民党山東省主席に任命されていた何思源が、寿光から傀儡軍山東第六方面軍張景月を率いて、日本軍の護送の下に済南に到着した。(97)

そのため八路軍は、傀儡軍から変わった国民党軍と日本軍に阻まれて、膠濟鐵路、津浦鐵路、隴海鐵路沿い等の大都市占拠をするという日本降伏直前に決めていた方針を改め、中小都市と広大な農村を占拠するようにした。(98)傀儡軍の占拠していた地区や中小都市は、つぎつぎと八路軍の攻撃を受けていったが、このように八路軍と傀儡軍や国民党軍の戦いは、日本降伏後も続き、やがて起こる大規模な国共内戦の前段となっていた。

おわりに

ここで本稿で述べたことを簡単にまとめておきたい。

日本軍の傀儡軍政策は、基本的には日本軍占拠地の治安維持を、日本軍と協力しながら担当する部隊を育成するというものであった。その中心として治安軍(華北綏靖軍)を育成しようとしたのであるが、汪精衛国民政府の成立とともに、国民党からの帰順部隊が増加してきた。日本軍はこれらの部隊に兵力の不足に悩む日本軍の肩代わりを行わせようとしたのであるが、治安維持という点では、これらの部隊はあまり役に立たず、むしろ警備隊、警察、保衛団の方が役に立った。そして抗日戦争末期になると、八路軍の攻勢に対してこれらの部隊は太刀打ちできず、日本軍の支配自体も崩壊に向かうのであった。

山東省では、抗日戦争前期の傀儡軍は、日本軍の侵入した鉄道沿線や公路沿いの小部隊で、あまり政治的信念の確固としていない土匪出身者等であり、彼らの多くは県長や警備隊に任命されて、県レベルで日本軍の支配を支えた。

抗日戦争中期になると国民党軍から投じた傀儡軍の数が、飛躍的に伸びてくるのであるが、その原因として、汪精衛国民政府の積極的な軍事拡張政策、日本軍による軍事的進攻と政治的な投降誘導活動の強化、東北軍や元西北軍の雑牌軍の戦力低下と山東省主席沈鴻烈の移動による地方軍の後ろ楯の欠如により、日本軍の攻勢に抗しきれずまた八路軍との地盤争いに敗れたこと等が挙げられる。

抗日戦争後期の一九四三年の特徴としては、国民党山東省政府警備軍であった呉化文軍、および東北軍榮子恒軍の傀儡軍化、于学忠軍の山東省からの移動による国民党正規軍および山東省政府の不在、八路軍の傀儡軍への攻勢が挙げられる。一九四四年以後の特徴としては、八路軍の局部的反攻と傀儡軍への攻勢、傀儡軍の八路軍への寝返り、汪精衛国民政府正規軍の山東省からの移動ならびに壊滅が挙げられる。

日本降伏後、多くの傀儡軍は再び国民党軍に変わったが、八路軍の攻勢は続き、それは国共内戦の前段となっていたのである。

- (1) 一九四〇年の傀儡軍の数は八万人、国民党軍は一六万六〇〇〇人であったが、一九四一年の傀儡軍の数は一二万二〇〇〇人、国民党軍は一二万二〇〇〇人となった。「山東区概況」(『抗日戦争時期解放区概況』 人民出版社 一九五三年)九〇頁。
- (2) この時期についての日本での研究については、石島紀之「日中戦争」(山根幸夫・藤井昇三・中村義・太田勝洪編『近代日中関係史研究入門』研文出版 一九九二年)を参照。

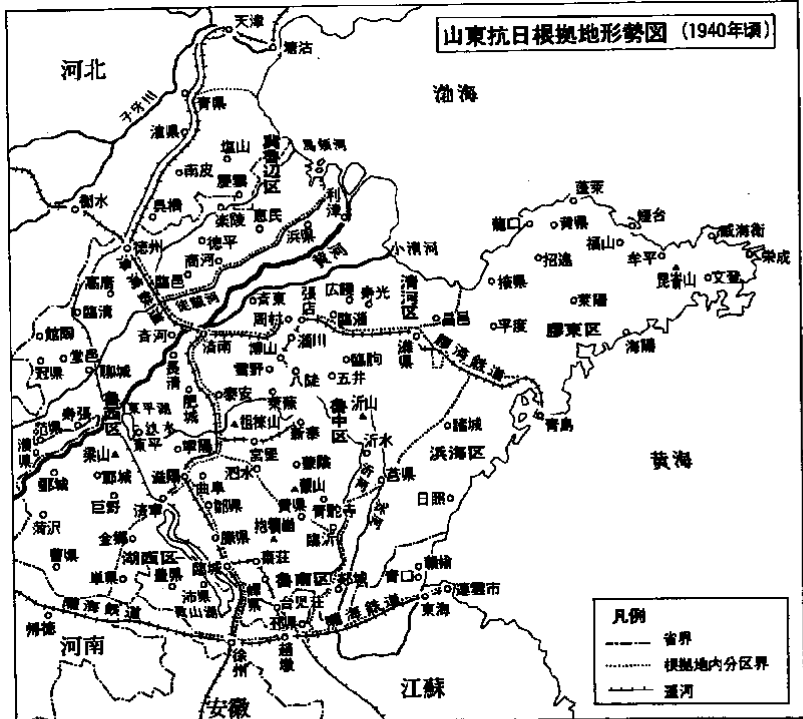
- (3) 石島紀之「中国占領地の軍事支配」（『岩波講座 近代日本と植民地』二 帝国統治の構造 岩波書店 一九九二年）。
- (4) 余子道「汪偽軍事力量的發展和消亡」（復旦大学歴史系中国現代史研究室編『汪精衛漢奸政權的興亡—汪偽政權史研究論集一』 復旦大学出版社 一九八七年）。David M. Paulson, “Nationalist Guerrillas in the Sino-Japanese War: The “Die-hards” of Shandong Province” (Kathleen Hartford & Steven M. Goldstein, Edit. *Single Sparkes: China's Rural Revolution*, Columbia University, 1990)。劉熙明『偽軍—強權競逐下の卒子(一九三七—一九四九)』稻郷出版社 二〇〇二年。
- (5) 馬場毅「山東省の傀儡軍について」（『社会科学討究』第一一五号 一九九四年三月）
- (6) 防衛庁防衛研修所戦史室『北支の治安戦』<一> 朝雲出版社 一九六八年 四五八頁。
- (7) 北京は、一九二八年六月以来、北平と改名していたが、一九三七年一〇月、傀儡組織である北平治安維持会が再び北京と改名した。ここでは当時の歴史用語として北京を使用する。
- (8) 前掲『北支の治安戦』<一>、四八三頁～四八四頁。なお一九四〇年八月、華北政務委員会華北綏靖軍總司令部の下に、憲兵司令部、治安軍第一、二、三集團軍司令部、独立歩兵第七、第八團司令部、華北警備隊司令部、勦共軍第一、第二、第三路司令部が所属していた。興亜院政務部「華北政務委員会組織系統表」（『調査資料』第六四号 一九四〇年一〇月(?)）(JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C01002492400、[陸軍省大日記・大日記乙輯・昭和十五年「乙輯 第二類 第一〇冊 図書其三」](#) (防衛省防衛研究所))
- (9) 前掲『北支の治安戦』<一>、同上 四八三頁。
- (10) 同上、四五六頁。
- (11) 同上、四五四頁。
- (12) 同上、四五五頁。
- (13) 同上。
- (14) 同上、四五六頁。
- (15) 同上。
- (16) 同上、四八四頁。
- (17) 同上、四八四頁～四八五頁。
- (18) 同上、四八五頁。
- (19) 防衛庁防衛研修所戦史室『北支の治安戦』<二> 朝雲出版社 一九七一年七一頁。
- (20) 同上、七二頁。
- (21) 同上、三五二頁。
- (22) 前掲『北支の治安戦』<一> 四九四頁～四九六頁、劉大可・馬福震・沈国良『日本侵略山東史』 山東人民出版社 一九九〇年 二二〇頁。
- (23) 前掲『北支の治安戦』<一> 五三八頁、辛瑋・尹平符・王兆良・賈蔚昌・王伯群主編『山東解放区大事記』（山東人民出版社 一九八二年） 五〇三頁。
- (24) 前掲『北支の治安戦』<一> 五七三頁。
- (25) 前掲『日本侵略山東史』 二二一頁。
- (26) 前掲『北支の治安戦』<二> 一三二頁～一三三頁、五〇六頁 前掲『日本侵略山東史』 二二〇頁。
- (27) 前掲『北支の治安戦』<二> 二五八頁、前掲『日本侵略山東史』 二二〇頁～二二一頁。

- (28) 前掲『北支の治安戦』<二>二九五頁～二九八頁、三〇二頁～三〇三頁。
- (29) 前掲『北支の治安戦』<一> 四五六頁～四五七頁、前掲『北支の治安戦』<二> 三四九頁。
- (30) 前掲「中国占領地の軍事支配」 二三三頁。
- (31) 前掲『北支の治安戦』<二> 三五〇頁。
- (32) 同上、三五二頁。
- (33) 同上、三五三頁。
- (34) 同上、三五二頁、三五三頁。
- (35) 同上、五〇七頁。
- (36) 前掲「中国占領地の軍事支配」 二三四頁。
- (37) 同上、二三五頁。
- (38) 同上。
- (39) 前掲『北支の治安戦』<二> 五五一頁。
- (40) 馬場毅「抗日根拠地の形成と農民—山東区を中心に—」（『講座中国近現代史』六 抗日戦争 東京大学出版会 一九七八年） 九四頁～九五頁。
- (41) 呂偉俊『韓復榘』 山東人民出版社 一九八五年 四二九頁～四三〇頁
- (42) 前掲「抗日根拠地の形成と農民—山東区を中心に—」 九四頁。
- (43) 黎玉「山東抗日遊撃戦争的發展（一九三八年六月）」（『解放』 四九期）。
- (44) 同上。
- (45) 「敵後抗日根拠地」の一つとしての山東抗日根拠地の形成過程については、前掲「抗日根拠地の形成と農民—山東区を中心に—」および馬場毅「山東抗日根拠地の成立と發展」（宍戸寛・内田知行・三好章・佐藤宏との共著『中国八路軍、新四軍史』 河出書房新社 一九八九年）、馬場毅「華北における中共の軍事活動、一九三九—一九四五 1945—山東抗日根拠地を例として」（波多野澄雄・戸部良一編『日中戦争の国際的共同研究 二 日中戦争の軍事的展開』 慶應義塾大学出版会 二〇〇六年） David M. Paulson, “War and Revolution in North China: The Shandong Base Area, 1937-1945,” Ph.D. dissertation, Stanford University, 1982 を参照。
- (46) 中共冀魯豫辺区党史工作組弁公室（王紀全執筆）「討伐偽劉本功部戦役」（中共冀魯豫辺区党史工作組弁公室編『中共冀魯豫辺区党史資料選編』 第二輯 專題部分 山東大学出版社 一九九〇年） 三二二頁～三二二頁。
- (47) 趙健民「魯西北偽模範縣長劉仙洲部覆滅」（前掲『中共冀魯豫辺区党史資料選編』 第二輯 專題部分）二九五頁、二九八頁、三〇七頁～三一七頁。
- (48) 黎玉「艱苦而偉大的山東抗日闘争」（中共山東省委党史資料徵集研究委員会『山東抗日根拠地』 中共党史資料出版社 一九八九年）二二七頁、裴宗澄「大漢奸趙保原覆滅記」（煙台地区行政公署出版弁公室編『膠東風雲録』 山東人民出版社 一九八一年）五八六頁～五八七頁。
- (49) 劉述和「劉桂棠」（中国社会科学院近代史研究所 宗志文・朱信泉主編 李新校閱『民国人物伝』 第三卷 中華書局 一九八一年） 二一七頁～二一九頁。
- (50) 丁文方・趙呈元・楊希珍・張敬忠主編『山東歴史山東歴史人物辞典』 山東人民出版社 一九九〇年 七三六頁。

- (51) 前掲『北支の治安戦』<一> 四八八頁。
- (52) 前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一四九頁～一五一頁、一五五頁。
- (53) 同上、一五三頁。
- (54) 同上、中共山東省東平県县委党史資料徵集研究委員会（李森執筆）「東平戦役」（前掲『中共冀魯豫辺区党史資料選編』 第二輯 專題部分）三三五頁。
- (55) 前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一五三頁、一六一頁。
- (56) 同上、一五五頁。
- (57) 前掲『山東解放区大事記』 一二二頁。
- (58) 前掲“Nationalist Guerrillas in the Sino-Japanese War: The “Die-hards” of Shandong Province ” p.135。
- (59) 陸軍・杜連慶『張学良与東北軍』 遼寧人民出版社 一九九一年 四二四頁。
- (60) 前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一五五頁。
- (61) 前掲『山東解放区大事記』 一二九頁、李実進「抗戦八年中冀魯辺区見聞録」（『近代史資料』 一九八三年第二期） 一五八頁。
- (62) 前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一五六頁、馬先陣主編・高秋萍副主編『西北軍将領』 河南人民出版社 一九八九年 八六頁～八八頁。
- (63) 前掲『北支の治安戦』<二> 一九九頁、なお劉漢・黄瑤・李維民・潘天嘉・楊国慶・白刃・李志経『羅榮桓元帥』（解放軍出版社 一九八七年）では李永平の投降を一九四一年としている（五三三頁）。
- (64) 前掲『北支の治安戦』<二> 二六二頁、前掲『山東解放区大事記』 二〇五頁。
- (65) 前掲『山東解放区大事記』 一四九頁、二三〇頁、前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一五六頁～一五七頁 前掲『北支の治安戦』<二> 三六九頁、中国人民解放軍済南軍区 政治部《済南戦役中呉化文起義》編写組『済南戦役中呉化文起義』 山東人民出版社 一九八七年 三頁、二五〇頁、前掲『山東歴史人物辞典』 五六〇頁、なおこの時「北支那」方面軍第二軍独立混成第六旅団(弘前の師団で構成)松岡治次級副官が呉化文への工作を行ったときの貴重な回想として、松岡治「敵師団司令部での工作」一九九四年(私家版)がある。貴重な資料を贈呈いただいた松岡治氏と、松岡氏の紹介をいただいた石島紀之氏に感謝申し上げます。
- (66) 前掲『北支の治安戦』<二> 三六九頁、三七〇頁、前掲『山東解放区大事記』 一五一頁、一五二頁。
- (67) 前掲『北支の治安戦』<二> 三七〇頁、前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一五九頁、『山東解放区大事記』 一五八頁。
- (68) 前掲「抗戦八年中冀魯辺区見聞録」 一七〇頁。
- (69) 前掲『山東解放区大事記』 一五八頁～一六三頁、前掲『羅榮桓元帥』 四八二頁～四九〇頁。
- (70) 前掲「山東区概況」 九〇頁。
- (71) 前掲『羅榮桓元帥』 四九七頁。
- (72) 前掲『山東歴史人物辞典』 五六九頁、許世友『我在山東十六年』 山東人民出版社 一九八一年 四頁。
- (73) 前掲『山東解放区大事記』 二三〇頁。
- (74) David M. Paulson, “War and Revolution in North China: The Shandong Base Area,

1937-1945,” Ph.D. dissertation, Stanford University, 1982, p. 254.

- (75) 前掲『山東歴史人物辞典』 六八四頁～六八五頁。
- (76) 前掲『北支の治安戦』〈二〉 三六九頁、三七〇頁、前掲『山東解放区大事記』 一五一頁、一五二頁、二三〇頁、軍事科学院軍事歴史研究部編著『中国人民解放軍戦史』 第二卷 抗日戦争時期 軍事科学出版社 一九八七年 四六一頁。
- (77) 前掲『山東解放区大事記』 一五九頁。
- (78) 前掲『中国人民解放軍戦史』 第二卷 抗日戦争時期 三八〇頁、前掲『羅榮桓元帥』 四九七頁～五〇〇頁、前掲『山東解放区大事記』 一七一頁。
- (79) 前掲『山東解放区大事記』 一七二頁～一七三頁、前掲『中国人民解放軍戦史』 第二卷 抗日戦争時期 三八一頁
- (80) 前掲『北支の治安戦』〈二〉 五〇九頁～五一〇頁。
- (81) 前掲『山東解放区大事記』 一八一頁～一八三頁、 前掲『中国人民解放軍戦史』 第二卷 抗日戦争時期 四〇四頁～四〇五頁。
- (82) 前掲『山東解放区大事記』 一八三頁、『中国人民解放軍戦史』 第二卷 抗日戦争時期 四〇六頁。
- (83) 前掲『羅榮桓元帥』 五三三頁。
- (84) 前掲「魯西北偽模範県長劉仙洲部覆滅」 三一七頁～三一七頁。
- (85) 前掲「討伐偽劉本功部戦役」 三二七頁～三二七頁。
- (86) 前掲「東平戦役」 三三五頁。
- (87) 前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一七三頁、前掲『山東解放区大事記』 一九〇頁。
- (88) 前掲『山東歴史人物辞典』七三六頁、前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一七三頁、『山東解放区大事記』 一九九頁。
- (89) 前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一七三頁、前掲『山東解放区大事記』 二〇五頁。
- (90) 前掲『山東解放区大事記』 二一六頁。
- (91) 前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一七三頁、前掲『山東解放区大事記』 一九九頁。
- (92) 前掲『山東歴史人物辞典』 六八四頁。
- (93) 前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一六四頁～一六五頁 前掲『西北軍将領』八九頁。
- (94) 前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一六五頁。
- (95) 前掲『山東解放区大事記』 二〇六頁～二〇七頁、前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」 一七一頁、前掲『中国人民解放軍戦史』 第二卷 抗日戦争時期 四四六頁～四四七頁。
- (96) 前掲『北支の治安戦』〈二〉 五六三頁。
- (97) 前掲『山東解放区大事記』 二三〇頁、前掲「汪偽軍事力量的發展和消亡」一七五頁、前掲『山東歴史人物辞典』七二一頁。
- (98) 前掲『山東解放区大事記』 二二四頁、二三一頁。



註 「抗日戦争時期解放区概況」付図5を基本にし作成したが、これは1945年頃の分区界を記しているの、冀魯辺区と清河区の分区界(この両者は1944年1月に合併して渤海区となる)、魯西区(1941年7月に冀魯豫区と合併して山東抗日根據地を離れる)の分区界、湖西区(1942年10月冀魯豫区と合併して山東抗日根據地を離れる)の分区界は、「中国人民革命戦争地図選」31-32頁、「中国人民解放軍戦史簡編」付図19を参照して作成。

(1) 注
拙稿「抗日根據地の形成と農民——山東区を中心に——」(講
座中国近現代史6)東京大学出版会、一九七八年)

(2)
拙稿「山東抗日根據地における財政問題」(史観)第一
一九八四年三月)